

北アフリカのチュニジアは日本の半分くらいの面積しかない小国だが、自然景観の変化が著しく面白い場所である。北部は地中海に面していてカルタゴやローマの遺跡にイスラム文化を知ることができるし、南部は乾燥地帯でサハラ砂漠に続いている。かなり以前に訪れた場所だが、思い出しながら紹介してみたい。

### チュニジア(1999年) トズールと大塩湖

トズールはアルジェリアの国境に近いオアシス都市で南部乾燥地帯を観光する玄関口である。国際空港があり、欧州からの直行便もある。日本からは遠いが、欧州からは近い。彼らにとっては異空間を満喫できるヴァケーション先なのだろう。観光客には欧州人と思われる人が多い。

高級なホテルも多い。私の宿泊したアブナワズ・トズールもそこに入るとまるでアラビアンナイトの世界に入りこんだ気がする。

(写真 3-1) トズールのホテル

トズールはナツメヤシのオアシスとして知られている。20万本ものヤシ園があり馬車に乗って見学した。ここで採れるナツメヤシの実が品質が優れていて「光の指」と呼ばれているらしい。



(写真 3-2) 広大なナツメヤシ園を馬車で見学する観光客。



このナツメヤシの実(ダット)は食用である。乾燥したものは砂漠の隊商の必携品で、これを主食として、旅をしているとのことだ。食べてみたが、ほのかに甘く油分も多いので腹持ちがよさそうだ。

ここには観光用に砂漠動物園が設けられている。砂漠の生き物が数多く見られるだろうと期待したが、たいした事がなかった。蛇やとかげ等の爬虫類が主体でさそりもいる。園内にはアフリカの他の地域に生息しているライオンやガゼル等の哺乳類やダチョウの放し飼いかも見られるが、それほど珍しい動物はいない。

それでもチュニジア唯一の砂漠動物園といわれていて、観光客には人気があるらしい。私が注目したのは入り口近くにいたチュニジア人の観光客でトルコ帽に長いガウンはこちらの人の正装である。著名人らしく取り巻きが多くいたが、係員の説明を聞きながら息子らしい男の子を連れて、ゆったりと見て回っていた。

(写真 3-3) チュニジア人の親子。男の子がえらく緊張しているのが愛らしい。



ホテルが郊外にあったので残念ながら街は見えていない。

ここからサハラ砂漠入り口であるドゥーズに向かう。その途中にあるのが北アフリカで最大といわれている大塩湖のショット・エル・ジェリドである。

チュニジアの南部には塩湖が幾つかあるがその中でもこのショット・エル・ジェリドが最大である。なにしろ最大幅 200km と 85km の巨大な塩湖なのだ。そこを横断する道路がある。

トズールを出るとまもなく塩湖に入る。どこまで走っても同じ風景だ。右を見ても、左を見ても塩の水平線が続いている。



(写真 3-4) 左に盛り土して作られた道路見える。白いのは塩の結晶である。クレバスの様に湖水が見える場所がある。

この景色は季節によって異なるらしい。冬の雨季には穏やかな湖面を呈し、夏には完全に干上がって、キラキラと太陽を反射する。

私が訪れたのは4月、春の季節だったので、まだ一部水面が残っていたのかもしれない。

同じ景色を2時間近く見ていると眠くなる。

うとうとしていると停車した。到着と思ったら違っていた。まだ途中でトイレタイムの休憩だった。これらの写真はその時に降りて撮ったものである。



(写真 3-5) 塩の結晶が湧き上がるようだ。

湖水の色は実に神秘的なマリンプルーである。この色は塩に強い微生物が生息するためだといわれている。場所によってはピンク色の水呈しているところもある。スカイブルーとマリンプルー、土の色と塩の白。時折車は通るが、音がない静寂の世界だ。地球とは思えない死の世界だ。微生物はいるらしいが、昆虫や魚が住んでいるだろうか、はたまた水中植物が生えているだろうか、調べてみたい気持ちになるのだ。



(写真 3-6) 道路沿いのトイレ。

休憩地点には飲み物とスナックを置いた小屋とトイレしかない。トイレは有料で、トイレ番がいた。ここに住んでいるはずはない。毎日通っているのだろう。

日本では見られない風景である。もっとも文明から遠いだけでなく、高濃度の塩分で生物とは無縁の世界のように思われる。

これを過ぎるともう一つの静寂の世界、大砂漠に繋がっている。